

あなたはわたしの劇場

山村さん

劇場

杉田

井本

田中

福島市内。繁華街。

山村さんとその同僚だった人たち。少し離れて劇場。店を出たところ。

山村さん「みなさん、今日はどうもありがとうございました」

杉田「いいえ、こちらこそ今のお店、出してもらって、お礼を言わなきゃ」

井本「そうですよ、今日は山村さんのお別れの会だったのに、ありがとうございました」

田中「ごちそうさまでした」

杉田「ごちそうさまです」

山村さん「いやいや、そんな、いいんですよ気にしないで。ちゃんと、もらうところからもらってますから」

井本「さすが、山村さん」

杉田「さびしくなったら、いつでも会社、遊びに来てくださいね」

田中「ついでに仕事もやってもらったりして」

杉田「ダメよもう、いつまでも頼ってちゃ」

田中「だって、できちゃうからなー。山村さんは」

山村さん「これで、やっと。田中くんも決算報告書一人で書けるようになるかもね」

井本「そうよ。頑張れ」

田中「あ、そうか、もう山村さんいないんだ。明日から大変だ」

皆、笑う。

井本「でも、ほんと、さびしくなりますよ」

山村さん「私もみんなと会えなくなるのは悲しいわ」

杉田「さっきから、気になってたんだけど。あの人、誰なんですか」

田中「あ、そうだ、一次会のときからいますよね。お知り合いのかたですか」

山村さん「あ、あれ。あれは私の劇場なの」

井本「え、劇場？」

山村さん「ええ、そうよ。ずいぶん迷ったんだけど。思い切って退職金で買ったのよ」

3人「へー」

山村さん「退職金っていっても微々たるものだけど。まあ、この会社に20年くらいは、無遅刻無欠勤でしっかり勤めたわけだから、それなりにはあったのよ。で、それ、全部つぎ込んで」

田中「買ったんですか」

山村さん「そう」

田中「劇場を」

山村さん「私、昔から劇場が欲しかったから。やっと夢がかなったわ」

井本「えー。よかったですね」

杉田「でも劇場って。人なんですか？」

山村さん「え？」

杉田「いや劇場って、人なんですね」

山村さん「ああ。私にとっては」

劇場、少しはにかんで、立っている。

劇場「仇敵はあなたのそのお名前だけ。たとえ、モンタギュー家の人でいらっしやらなくとも、あなたにお変わりはないはずだわ」

山村さん「今日のソワレはロミジュリみたい」

井本「え、なんですか」

山村さん「ああ。演目はロミオとジュリエットです」

3人「へー」

劇場「まあ、だれ、あなたは。そんな闇に隠れて、人の秘密を立ち聞くなんて」

3人「わー」(拍手)

井本「あ、そろそろ」

田中「そうだ。終電の時間だった」

杉田「田中くん、JR？」

田中「ええ、はい」

杉田「私も飯坂線だから、駅まで一緒に行こうか」

田中「はい」

井本「私、バスで帰るから、こっち。じゃあ、山村さん、お元気で」

山村さん「さようなら」

皆、「さよならー」「お元気でー」と去る。

残された山村さんと劇場。

山村さん、深いため息をついて。

山村さん「帰ろうか」

劇場「そのお言葉のひびき、私の耳は、まだそのお言葉を、百とは味わってはいませんが、声にははっきりと聞き覚えがある」

山村さん、家路につく。劇場もそれに続く。

福島駅。

杉田と田中、駅に入ってくる。

田中「なんか、飲み足りないすね」

杉田「あ、じゃ、うち来る」

田中「え。いいんですか。旦那さん大丈夫ですか」

杉田「ああ、そんなの気にしないから。もうぐっすり眠ってるわよ」

田中「じゃお邪魔します」

二人、飯坂線のホームへ。

田中「一次会も人、少なかったですね。支店長無理でも、課長は来るでしょ普通」

杉田「まあねー。一応、私と井本さんは幹事だし、二人だけだったらどうしようって思ってたけど、田中くんとか若い人も来てくれてほんとよかった」

田中「でも5人ですよ。男おれだけだし。なんか、話合わせるのきつかったです」

杉田「え。ちっともしゃべってないじゃない」

田中「ああ。とにかく山村さん、なに言ってるのかわからなくて」

杉田「そうね、ちょっと不思議なところあったね、あの人、最後まで」

田中「まー地味っていうか、存在感薄いっていうか」

杉田「ね。あの人知ってた。うちの会社入ってから、一つのミスもしたことないだって」

田中「へー」

杉田「信じられる、これまで1円の誤差もなくあの膨大な書類に数字打ち込んこんできたってことよ」

田中「ふーん」

杉田「私、そういう意味ではあの人尊敬する。すごいつて思う」

田中「なにが面白いんすかね」

杉田「え」

田中「だって、そんなのなにが面白いんですか」

杉田「面白いとかじゃなくて。生き方としてよ。毎日のルーティンの作り方とか、山村さんの人生、地味は地味なりに凄みがあるっていうのかな」

田中「それ、悪口にしか聞こえませんよ」

杉田「そうかな。言葉にするとそうだけど、なんて言うのかな、誰にも真似できないことを彼女は達成してるんだと思う」

田中「わかりませんね。おれには」

杉田「田中くんまだ若いから」

田中「じゃ、会社なんでやめたんですか。定年まではまだあるでしょ」

杉田「そうよね。課長もびっくりしてた。山村さんは、ずっといると思ってたから」

田中「けっこう、お金入ったって噂ですよ。実家が浪江だから」

杉田「あー。そう」

杉田、田中の腕をとり肩に頭をのせる。

杉田「でも、そういう噂って誰が流すんだろうね」

田中「あ、おれ、今日、杉田さんが幹事だから来たんですよ」

杉田「え。なにそれ」

田中「いや、まあ、そういうことです。もちろん、山村さんのこともありますよ。ありますけど、それはさておき

杉田さんが参加するんだってことで来ましたね、正直言って」

杉田「へー。でもね、そういうことは口に出して言うことじゃないのよ」

田中「あ、そうすか。はい」

杉田「あ、来た」

二人、列車に乗り込む。

山村さんと劇場、アパートの部屋に到着。

山村さん、手を洗い、うがいをし、洗顔し、寝る支度。それを見守る劇場。

山村さん、就寝。枕もとには劇場。

劇場「恋するものというものは、自分たちの美しさだけを明かりにして、結構恋の逢瀬は遂げるといこと、それに、もしもまた恋が盲目なら、なおさら夜の闇はふさわしい」

山村さん「ね電気消して」

劇場、明かりを消す。

劇場「さ、来ておくれ、黒一色に、装いも厳しい老女の夜、お願いだわ、純潔無垢の処女と童貞と、その二つを賭けたこの勝負に、勝って、しかも負けるという術を教えてください。そして、私の頬に騒ぐ、まだ人馴れぬ若い血を」

山村さん「もういい。もういいから」

静寂。

山村さんの嗚咽が聞こえる。

劇場、そっと座っている。

そして、長い年月が流れた。

阿武隈川の河川敷。昼、良い天気。市民が散歩している。

山村さんと劇場が来る。劇場は風邪をひいたのか憔悴している。

山村さん「ああ。やっぱり散歩はいいわね。ほら、あそこ、阿武隈川が流れている」

山村さんはベンチに腰掛ける。

劇場「おお、花の顔にかくれた毒蛇の心！それにしても、あの恐ろしい竜が、こんな美しい洞窟に住んだためしがあるのかしら？麗しの暴君！天使のような悪魔！鳩のような羽根をつけた鳥！狼のような残忍な子羊！」（と、激しく咳き込む）

劇場「ちょっと、水もらってもいいですか」

山村さん、ペットボトルの水を劇場に渡す。

劇場「なんか、風邪をこじらせたみたいで」（水、飲みつつ咳払いで喉を整える）

劇場「……姿は神に似ながら、心は見下げ果てた根性！とにかく見かけとはまるで正反対の、いってみれば、地獄の聖者、名高い大悪党！（咳き込む）おお、造花の自然よ、この世の楽園とも見紛うあの美しい身体の中に、これはまた悪党そのままのあの魂を宿らせたからには、さぞかし地獄では、大騒ぎだったろうと思うわ」（激しく声がしゃがれてしまう）

劇場「喉が、痛くて。声が、出ません。どうか、もう、勘弁してください」

山村さん「いいえ、あなたは私の劇場です。あれやって、あれ。いつもの場面」

劇場「な、なんだろう、これは？ 盃が、しかもロミオ様のお手にしっかり握られて」

山村さん「そんな声では聞こえません」

劇場「ああ、あれは人の声？ぐずぐずしてはいられない。おお、うれしいこの短剣！ この胸、これがお前の鞘なのよ。（胸を刺す）さあ、そのままにいて、私を死なせておくれ」

劇場、死ぬ。

山村さん「あなたはわたしの劇場。あなたはわたしの劇場よ」

劇場は永遠の眠りにつく。

山村さんは、劇場の覚醒を待っている。

阿武隈川が豊かに流れる。